

「知られざる日本の国境展」
沖縄開催の意義

岩下 明裕

歴史的な文脈で「固有の日本」をイメージすれば、それは本州、四国、九州のみから成りたつ。ユーラシア大陸の境界(国境)問題を研究してきた私は、なぜ観念的で中身がない「固有の領土」なる主張が、まかり通るのか不思議だつた。英語に類似の表現はなく、

とき、どこからどこまでが、そして何が日本なのかを自問することなく、「デモクラシー」なる空虚な錯覚のなかで、本土は平和をむ

く居座りによって、隣に暮らすロシア人との関係構築さえおぼつかない。沖縄は米軍支配の後、日本の管轄に戻ったが、基地の境界で寸断され、空間の多くが自由にならない。そして本土の住民は国の「身体性(領域への自覚)」を喪失し、「辺境」の人々を忘れてい

る。北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

構成された「知られざる北の国境」展は、釧路、福岡、対馬なども巡回した。

移動展IN那覇「知られざる日本の国境」は、21〜26日に県立博物館・美術館県民ギャラリー3で開催。入場無料。21日にはDVD上映会と座談会が午後6時30分から同館講堂で開かれる。金成浩(琉球大学)、佐藤学(沖縄国際大学)、岩下明裕(北海道大学)の3教授が登場。

11月に開催された対馬市での「知られざる北の国境」移動展

「辺境」に光当て 思い紡ぐ

また「昔ながらの領土」という意味でもない。北方領土や尖閣が日本の「昔ながらの領土」でないことは誰もが知っている。

さほつてきた。矛盾や困難の大部分を境界地域におしつけたまま。戦後日本に突如立ち現れた境界が、新たな空間の「辺境」に追いやれた人々にいかに辛酸をなめさせたかは言うまでもない。当時、

は、現場のリアリティーと現地の視線を提示することで、かかる現状を変えていこうとする。手始めに、北海道民の多くでさえ忘れて

いる、かつての北国境、樺太や千島の存在とその意味を想起させるべく昨年12月から実物資料を中心

に北大総合博物館で展示を行った。日本で唯一現存する樺太国境標石(日露戦争後に北緯50度線に設置)や国後と根室の間に敷設されていた旧海底ケーブルなどから

現実感の乏しい境界意識の派生は、日本の敗戦のあり方によると私は考える。統治の専横ぶりや独善性は別にして、戦前の日本は北は満州、東はカムチャツカ近辺、南は南洋諸島、西は台湾から東南アジアまで拡大していた。敗戦により、その空間が一挙に崩壊した

台湾、南洋諸島、朝鮮半島の中継地点であった与那国、小笠原、対馬は突然、隣人たちとの交流を断ち切られた。北千島や樺太への中継地点であった根室は、ソ連の南千島(択捉・国後)占領となお統

一教授)

この南と北を一体とした特別企画が、今回、那覇で実現する「知られざる日本の国境」展だ。「辺境」と「国境」を紡ぐ糸。このネットワークから世界を変える新たな光が生まれる。

